

3. 沿 革

坂東市を含む猿島台地にいつ頃から人が住み始めたのかは定かではないが、縄文時代（縄文海進）になると飯沼や菅生沼、鶺鴒沼などの水辺に集落が形成されていたことが数多くの遺跡から分かる。弥生時代には関東にも稲作が広まり、大地に種をまいては収穫する農耕生活が定着。古墳時代には強大な権力を持った豪族たちによって、上出島古墳、高山古墳など大型の古墳が造築された。

平安時代中頃には桓武平氏の系統から平将門が出現し、強力な軍団を統率して石井（現・坂東市岩井）に営所を築いた。土地の開墾と馬牧経営に力を注いだ将門であったが、一族間の内紛が中央政府の地方官同士の争いと結びついて、関東全域をおおう戦乱に発展した。律令国家をも揺るがす争乱であったが、天慶3年（940年）将門は藤原秀郷・平貞盛連合軍に敗れ、「猿嶋郡の北山」の地で戦死したといわれている。

鎌倉幕府が成立し、政治の実権が武家の手に移ると、当地域は幕府の御家人である下河辺氏が治め、さらにその一部は幸嶋氏に受け継がれていくことになった。鎌倉幕府滅亡後、南北朝の争いの中で暦応2年（1339年）には下総国北部一帯で合戦（下河辺庄合戦）が行われた。群雄割拠の戦国時代には後北条氏の北関東侵攻拠点として飯沼城（逆井城）が築城されるが、天正18年（1590年）に豊臣秀吉が小田原を攻め後北条氏を滅亡させると飯沼城も廃城となった。

江戸時代になると関宿藩や幕府の領地としての支配を受け、利根川の大規模改修工事や飯沼新田開発等の干拓事業がおこなわれた。また、水運が発達して物産流通が盛んになると、藩や幕府の奨励もあって商品作物としての猿島茶が栽培され、幕末には横浜からアメリカへも輸出された。

明治維新後、廃藩置県を経て当地域は茨城県に属し、明治22年の市町村制の施行により11の新しい村（岩井8村、猿島3村）となった。その後、昭和30年には1町7村（岩井町、弓馬田・飯島・神大実・七郷・中川・長須・七重村）が合併して岩井町が誕生、昭和47年には市制を施行した。一方、昭和30年に生子菅村と逆井山村が合併して富里村が成立し、翌31年には沓掛町と富里村が合併して猿島町となった。

そして平成17年3月、合併特例法に基づき岩井市と猿島町が合併して「坂東市」が誕生、現在に至っている。